

## 問題解決能力を育てる総合的な学習Ⅱ

### ー 総合的な学習を支える学習技能や教育課程についてのー考察 ー

天内純一 浪岡町立本郷小学校

#### 要旨

総合的な学習のねらいは「学びの基礎を育てること」であり、問題解決能力を育成することである。このねらいを達成するためには、総合的な学習を支える基礎・基本としての学習技能の習得が欠かせない。そこで、本論文では総合的な学習を支える学習技能について、具体的な事例も加えながら述べてみた。

また、総合的な学習を充実させるための教師の役割、さらに、教育課程の改善という点から、午前五時間制、二学期制の意義についても考察してみた。

【キーワード】 小学校、総合的な学習、基礎・基本、問題解決能力、学習技能  
午前五時間制、二学期制

#### 1. はじめに

待望の「総合的な学習の時間」がスタートした。

「これで子どもに本当の問題解決能力と、生きる力を育成することができる。」と考えて、2002年度の総合的な学習の本格的なスタートを心待ちにしていた教師は多かった。このような教師は日常の教育活動で二つの不足を感じていた。

一つは時数の不足である。13年度までの学習指導要領では、子どもに「問題」を持たせたり、主体的に問題追究させたりする時間が十分に確保されていなかった。

また、もう一つは学習内容の不足である。子どもが興味を持って真剣に取り組むような探究活動をさせたいと考えた場合、子どもが興味・関心を示す事象の範囲は限りなく広く、学習指導要領に示されている教科や領域の学習内容だけでは足りないのである。

一方、どんな学習活動をさせればよいのかという不安と戸惑いを持った教師も多い。その中から次のような問題が出てきた。

一つは総合的な学習のねらいを「問題追究」ではなく、「体験」と捉え始めた教師が多いことである。「子どもに問題を持たせる段階」に短い時間しか取らない実践をいくつも見た。子どもの「深まりのない問題意識」を抛り所にして、すぐ体験活動に入る。子どもはいろいろな場所に行ったり、これまでと異なった活動をしたりするので、はじめは興味を示すが探究意欲が継続しない。体験は大事であるが、発展性を欠いていたり、体験だけに止まってしまっていたりしてはいけないのである。体験は問題解決の過程の中にしっかり位置づけられていなければならない。

また、危惧されるような現実もある。総合的な学習の指導計画の中に、従来学校行事とされてきたもの、例えば宿泊学習や農業体験、さまざまな全校活動などを取り込むのである。これは一つには授業時数確保が目的である。それらの活動によって、子どもの追究力・思考・判断力がどのように育成されるかという点が不明確であるにもかかわらず、とりあえず、削減されるおそれのある学校行事を総合的な学習に組み入

れるのである。また、極端な例としては、運動会、学習発表会にかかわって、そのための「練習時間」を総合的な学習に入れようとする動きも一部にある。

言うまでもなく、子どもにさまざまな体験をさせることは有意義である。しかし、細切れの学校行事を総合的な学習の中に持ち込んでみても、子どもの追究力は育たない。

これら本来特別活動の領域であったものを持ち込むのは、新設された総合的な学習の意義を理解していないのが原因である。この傾向が続くと総合的な学習は、かつての「ゆとりの時間」や「学校裁量の時間」のように、時数調整の道具に使われやがて空洞化し消滅するであろう。

また、学力低下論が叫ばれはじめ、総合的な学習がその原因の一端であるかのような批判も出てきた。子どもの学力は確かに低下している。自ら課題を見付け、学び、考え、判断するという問題解決能力、また、主体的、創造的に取り組む態度、自己の生き方を考えるという力が大きく低下しているのである。この学力低下という、現在の教育が抱えている課題や現状に対する認識や危機感が欠けている。

これまでの論文<sup>1)2)3)</sup>では、総合的な学習におけるインターネットの活用や、学習過程の中の「問題把握の段階」の工夫について述べたが、これらは総合的な学習の一部分についての言及であった。

本論文では総合的な学習のねらいを再確認するとともに、これまで触れることができなかった基礎・基本、学習技能、その他の総合的な学習を支える教育課程等について、幅広く筆者の現在の考えや工夫・改善点等を述べる。

## 2. 総合的な学習のねらいについての考察（再確認）

大木は教育ジャーナルで画一化された授業として次のような例を挙げている<sup>4)</sup>。

- ・教師が抽象的な質問をする → 子どもはただ挙手をする
- 教師は無意図的に指名する → 子どもが発表する
- 教師は一人でうなずく → 「いいね、わかったね」と教師は一人で確認する
- 教師は工夫のない板書をする → 子どもはそれを黙ってノートに書き写す
- そこでチャイムが鳴り授業は終了する
- これが毎日続く 果たして子どもたちは・・・・

これは、教師に教育技術が欠けている場合の授業例であるが、これと大差ないような授業が数多く行われていることを私たち教師は深く反省しなくてはならない。教師だけの都合によって子どもの発言を操作したり、子どもの思考の流れと関係のない学習過程を組んだりすることが多いのである。

また、このような授業とは異なるが、「問題解決型を否定する方法」をとる授業もある。より適切な発問や指示によって、子どもを一定のルールに乗せて正解へと導くものである。ここでは、一つ一つの発問・指示、そのタイミング等について細部にまでわたって検討されることになる。このような学習過程も時には必要である。知識・理解は軽視できないものであり、できるだけ効率的に知識や技能を身に付けさせることは重要だからである。

ただ、常にこのような方法をとっていけば、子どもは受け身の学習ばかりを積み重ね、やがて指示待ち人間となる。そして、優れた指導者のもとでなければ学習を進められなくなる恐れがある。教師からの一方的な指示が有効であるのは、それに適した学習内容の場合だけであるということを再確認しておく必要がある。

新学習指導要領によれば、総合的な学習のねらいは問題解決能力と生きる力の育成である。

これは視点を変えてみると、「学びの基礎を育て、学びへの意欲を育てる」ということではないだろうか。佐伯は、「日本の小学生から大学生にみられる『学び』の喪失現象は、『学びの基礎』が培われていないことが原因だと指摘し、『ホントに本当のこと』を希求する執念が少ないのは、解き方や解答を出す手続きばかり教えられてきたことによると述べている<sup>5)</sup>。

確かに、日本では幼いときから「それって本当か」を問いつめるために多くの授業時数が設定されてこなかった。いわゆる既存の知識や技能を身につけさせるために、ある程度ルールを敷いた問題解決学習が行われてきた。問題把握の段階にじっくりと時間をかけ、子ども主体の追究活動を取り入れるということがなかなかできなかった。

各教科の学習ではそれぞれ学習内容が決められており、限られた時数を使って教科のねらいを達成しようとするれば、一人一人の子どもの問題追究は後回しにされてしまう。さらに教師の反省として、教材の精選と教材研究の深化が叫ばれてきたにもかかわらず、依然として教科書に依存した授業を行ってきたことも原因である。

「それって本当か」を自分で疑問をもってとことん追究するというのが真の問題解決であると考えれば、これまで各教科で行われてきた問題解決学習は不十分なものであった。このような学習を続けていても子どもに問題解決能力が育成されないという反省のもとに、英断をもって創設されたのが総合的な学習である。この特設された多大な時間を活用して、子どもに学びの楽しさを実感させるとともに、「学びの基礎を育て、学びへの意欲を育てる」ことが強く求められているのである。

### 3. 問題解決能力を育成し学びの基礎を育てる総合的な学習

総合的な学習のねらいである「学びの基礎を育て、学びへの意欲を育てる」ための手立てとして、主として4つの点について述べる（図1）。

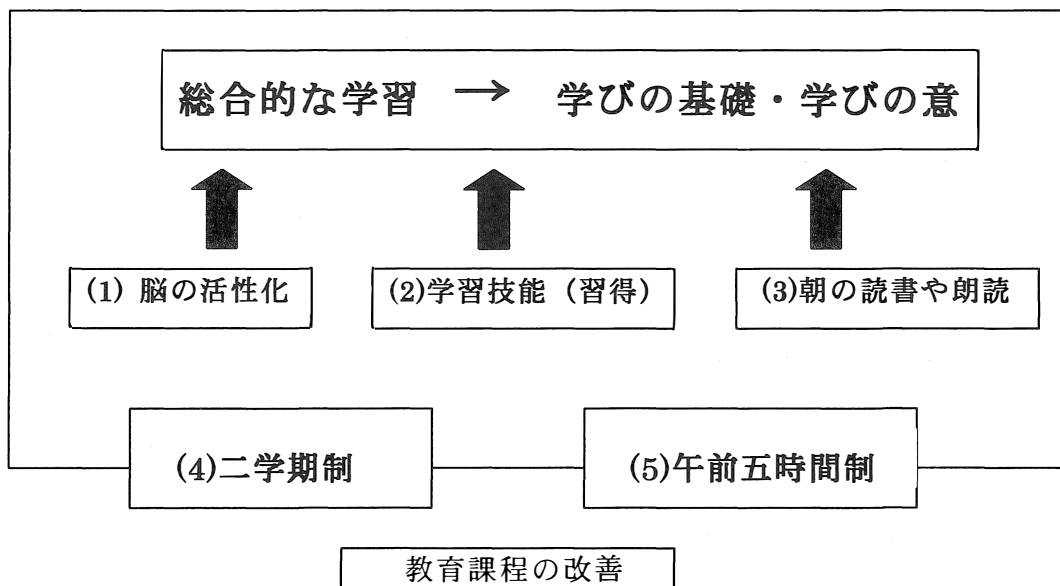


図1 総合的な学習のねらい達成の手立て

## (1) 総合的な学習と脳の活性化

### ① 学力低下と漢字、計算

学力低下論に対応して、次のような声が聞かれることがある。

「うちの学校では学力を低下させないために漢字と計算に力を入れることにしました。」

「基礎・基本を確実に身に付けさせるために漢字と計算の特設時間を設けました。」  
これはどこがおかしい。

漢字と計算が学力の基礎の一部であることは否定しないが、その徹底によって基礎・基本が身に付くとは思わない。漢字と計算以外に基礎・基本として大切なことがある。項を改めて述べるが、学力低下への対策、基礎・基本の定着として、漢字・計算をもってよしとする風潮には問題がある。

子どもの学力は低下している。自ら課題を見付け、学び、考え、判断するという問題解決能力、また、主体的、創造的に取り組む態度、自己の生き方を考えるという力が大きく低下しているのである。

### ② 「読み・書き・計算」と前頭葉の活性化

読み・書き・計算の習得は基礎・基本の一部であるが、その面よりも、ここではその練習過程で脳が活性化されるという点を強調したい。

漢字や計算をある一定の条件（速さと正確さ）を重視して反復練習することによって、脳の働きが柔軟になり、思考力・判断力・創造力の伸長に繋がるのである。川島は、「難しいことを考えているときよりも、単純な計算や音読をしているときのほうがはるかに活発に脳が働いている。」「体を鍛えるときと同じように脳を毎日使っていくと鍛えられる。・・・週5日のトレーニングでは持続的な向上が認められる。」と述べている<sup>6)</sup>。

計算と似ているが、以前に担任した3・4年生の子どもたちに珠算に取り組ませたことがある。集中して物事に取り組ませると、子どもは信じられないほど多くの技術を習得したり、多くの事がらを暗誦したりする。筆者の学級の珠算の場合は、3・4年生の2年間で学級の子の三分の一が商工会主催の3級検定に合格するという結果が出た。この時の子どもたちは算数における計算技能が高かったことはもちろんであるが、同時に国語をはじめとして他教科でも大きな成果をあげていた。珠算を通して活性化された脳がその他の学習でも柔軟に活動した結果と思われる。

計算や漢字練習を効果的な方法で繰り返すことが、学力の向上に大きな効果があることは、杉渕の実践<sup>16)</sup>からもうかがうことが出来る。

計算力や漢字書き取り力を高めて学力が高まったと考えるというのではなく、それらを身に付けていく過程で「脳が活性化される」ことに目を向けたいものである。この活性化された脳の力で、総合的な学習に取り組むのである。

## (2) 基礎・基本としての学習技能

総合的な学習は「学びの基礎を育てること」であるから、求められる基礎・基本として最も大切なのは漢字や計算の力ではなく「学習技能」である。この学習技能の育成に力を注ぎ、学力低下を防がなければならないと筆者は考えている。

有田は大きく5つの学習技能(はてな発見技能、めあて、見通しをたてる技能、調べる技能・考える技能、評価する技能)をあげ、さらに18に細分化している<sup>8)</sup>。有田の学習技能を参考にし、これまでの筆者の授業経験をもとに再構成したものが以下に示す5つの技能(図2)である。

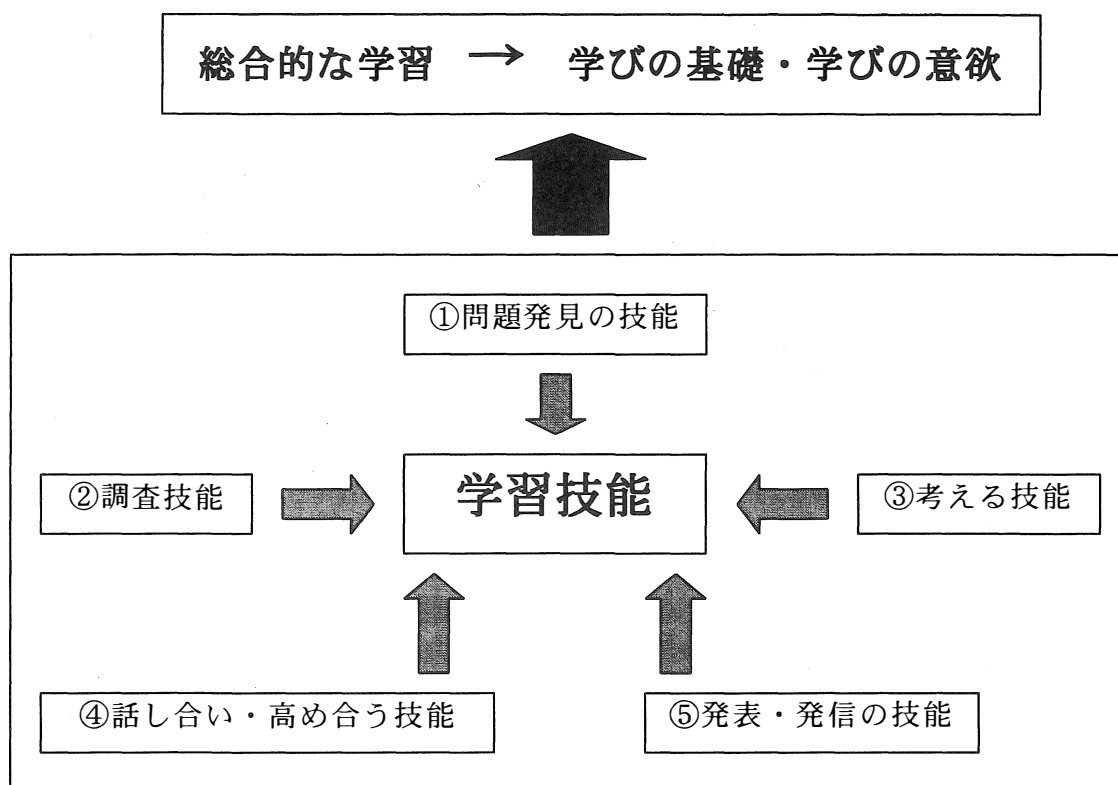


図2 総合的な学習を支える5つの学習技能

①問題発見の技能

この技能を身につけさせるのには有田の「はてな帳」が最も有効であろう<sup>8)</sup>。

この「はてな帳」は子どもが日ごろ疑問に思ったことや、それに対する自分の調査や考えたことなどを記録するもので、継続することによって、子どもの問題発見技能は著しく伸びる。

このはてな帳と平行して、教室環境を工夫し、学級の子どもたちが見つけた疑問や、それに対する自分なりの調査結果を日常的に掲示すれば、問題発見力は更に高められるのではないだろうか。

この他に筆者は次のような二段階の問題発見トレーニングが有効ではないかと考えている。

ア. 写真や絵、表、グラフなどから疑問点を考えさせる。

(例えば「5つ見つけなさい」と指示する等)

イ. 箇条書きした疑問について、自分なりの予想を書き加えながら、三つに分類する。

△調べる必要のないもの

○簡単に調べられそうなもの

◎時間をかけて調べたいもの

アはよく行われる方法であるが、そこから出てきた疑問を「同列」に考えて、課題づくりや調べ学習に進んでしまう授業が多い。アの段階で出たものをイの段階で吟味・分類するのがこの方法の特徴である。

このような問題発見トレーニングを意図的・継続的に行うことによって問題発見力を高めることが大切である。

## ②調査技能

有田が細分化してあげている技能の中で調査技能に当てはまるものに、次のようなものがある<sup>8)</sup>。

- ・国語辞典、各種事典、教科書、資料集、地図帳の使い方
- ・おたずね   ・観察       ・実験
- ・見学        ・情報を集める

これらの学習技能が、日々の授業の中で計画的・継続的に指導されれば、より深い問題追究がなされることになる。

筆者はこれらの学習技能の中で、特に情報収集と見学の技能を重視している。これまでの学習では、調べ学習といっても、少ない資料から、「そのまま丸写し」が行われることがあった。情報をそのまま疑いもせず、信じてしまうというのでは、これからの変動する社会を生き抜くことはできない。総合的な学習では特に偏った情報に惑わされることなく、幅広い情報を収集する能力を身に付けさせたい。

そのためにインターネット活用技能の習得は欠かせないところである。インターネットを「資料集」のように活用するだけでなく、「情報交換」の手段として活用することが大事である。全国各地の小学生による「学びの共有」が総合的な学習の集大成のひとつであると筆者は考えている。

小学生が持った「課題」は、全国各地の同じ小学生との交流の中で、より実感を伴って理解されることが多い。

例えば、三内丸山遺跡について教科書や資料集で調べてわかったつもりだが、青森県の小学生からの現地レポートによって一気に逆転されることもある。また、ゴミ収集袋の値段の違いから、ゴミ問題が全国でどの程度深刻化しているのかがわかることもある。さらに、「桜の開花」や「米の収穫」等の時期をリアルタイムで交換し合うことにより、日本の自然や人々のくらしの違いを実感できる。

インターネットやテレビ電話を自在に活用する教師が教育現場に登場してほしいところである。

また、見学の機会を増やすことによって、見学技能を身につけさせ自分の力で地域の人々にインタビューしたり、いろいろな博物館を訪ねたりすることができるようにしたい。見学の前に、子ども自身が手紙を書いたり、電話をかけたりして依頼するという活動が欠けていることが多い。ねらいを明確にした見学をするという態度を育てる意味で「依頼の技能」習得も大切である。

## ③考える技能

一問一答式の授業や、指示だらけの授業を続けていると、子どもは「単語」か「短文」でしか答えなくなる。教師の側に「答えてほしいこと」が決まってしまうと、それを引き出したいために、主発問 → 補助発問 → 補助発問の補助発問 → さらに補助発問・・・と続けていく授業もある。

一定の考えや答えを導き出すのではなく、子どもの自由な発想が生まれ活かされる授業を心がけたいものである。筆者はこれまでに社会科の授業として、ディベート、ロールプレイング、If then などの実践を行った<sup>16)</sup>。正解がないものについて自由に思考力を働かせ、自分なりに判断する、そのような授業も指導計画の中に組み入れるべきである。

## ④話し合い・高め合う技能

筆者は「からませ発言」と名づけているが、子どもの発表が雪だるま式に膨らんで

いくような授業を心がけなければならない。例えば、教師の発問をP、子どもの発言をAとして授業の記録をとった場合に次のようになる授業である。

- P 「大造じいさんとがん」という題を、「残雪と大造じいさん」にかえてみたらどうでしょう。
- A 作者が書きたかったのは、がんの英雄のことだから、残雪と・・・にするのがよいと思います。
- A 題名は大事だと思います。残雪と言うと、春の山のお話と間違えます。
- A がんと大造じいさんに私も賛成です。でも、「がん」を漢字で書かないと病気だと勘違いします。
- A この物語は大造じいさんのいろいろな作戦が書いてあるので、大造じいさんが先にきてよいと思います。
- A 大造じいさんの気持ちはたくさん書かれています。残雪の行動や気持ちはすべて大造じいさんの目を通したものです。
- A 大造じいさんが先でよい気がしてきました。でも、「がん」だけでなく、「がんの英雄」としたいです。
- A さっき言いましたが、がんを漢字にして、「大造じいさんと<sup>がん</sup>の英雄」。
- A 題名にしては長い感じがします・・・・・・・・・・
- ・・・・・・・・・・・・・・・・

教師の適切な発問や指示を工夫して、このような授業を数多く行い、子どもに話し合い・高め合う技能を修得させることが大切である。

#### ⑤発表・発信の技能

平成15年度大阪教育大学附属天王寺小学校の公開研究発表会に参加して、総合的な学習の授業を参観したが、総合的な学習を支える発表力の重要性を実感した。授業は、子どもたちがそれぞれ考えた「おやつ」をどのように他の人にアピールするかというもので、グループに分かれてポスターセッションの形式で行われた。パワーポイントを使ったグループもあったが、ほとんどは模造紙に書いたり実物を提示したりして発表した。方法はオーソドックスなものであったが、子どもたちのプレゼンテーション能力の高さには驚かされた。

紙に書いたものをただ読み上げて感想や質問を受けるというものではなく、聞き手を意識した話し方、身振り手振り、役割分担などに工夫が見られた。自分たちの発表について感想を書いてもらうためのアンケート収集も積極的であった。

この「発表力」を育成する場合は日々の教育活動の中に溢れているといってもよい。授業だけでなく、朝の会、全校集会、行事の司会・意見発表等々、あらゆる機会でも子どもの発表を大事にし、適切な支援をして高めていくことが大切である。

また、「発信」する場合に、②で述べたように、インターネットの活用は欠かせない。(インターネットによる発信については以前の論文<sup>1)2)3)</sup>を参照)インターネットも視野に入れて、幅広いプレゼンテーション技能を身につけさせることが大切である。

以上5つの学習技能について概要のみを述べたが、このような技能が備わっていない子どもに問題解決はできないし、総合的な学習も成果をあげることができない。

各教科・領域の学習や教育活動全般を通して学習技能を継続的に育成していくべきである。同時に、総合的な学習の時間の中にも、必要に応じて学習技能育成の時間を設定する必要がある。

### (3)朝の読書や朗読で育てる創造力と論理的思考力

学びの基礎としての学習技能について述べてきたが、総合的な学習の狙い達成のためには創造力や論理的な思考力の育成が欠かせない。この二つの力を育成するために以下に述べる。

#### ①朝の読書

論理的な思考力は言葉によって培われていくのであるから、語彙が豊富で言葉による表現力が育っている子どもほど、多彩な思考や判断ができることになる。

林が提唱した朝の読書<sup>9) 10)</sup>は、語彙を豊富にし、活字に親しむ子を育てるという点で大きな成果をあげている。さらに読解力と表現力を高めた実践例が数多く紹介されている。朝の読書を継続することによって、失われつつある子どもの読書への興味・関心を高め、言語を通して論理的に思考する能力を育成することができる。

また、読書は読解力・表現力を育成するだけでなく、読者を物語の世界に導くことによって、個に応じた豊かな想像力を膨らませ、同時に創造性を高める働きも有している。このようなことから読書は問題解決能力の基礎として重要な役割を果たすと思われる。

筆者が「朝の読書」に着目する理由として、次の点がある。

- ・朝の時間に急激な運動をしたり、短時間で習得するドリル的な学習をしたりしても効果が少ない。のみならず、学習意欲を削ぐおそれがある。
- ・朝の「心身の完全に目覚めていない」状態でこそ想像力が働く。
- ・その日の一番はじめに、「自由に物語の世界に遊ぶ」という学習に取り組むことによって、学習への意欲が高まる。
- ・基礎・基本には、教師が指導することによって身に付けさせなければならないものが多いが、読書習慣はその典型的なものである。
- ・朝の読書が提唱している「みんなでやる」「毎日やる」「好きな本でよい」「ただ読むだけ」という四原則はシンプルで実にわかりやすい。

このような点から考えて、朝の読書を教育課程の中に位置づけて毎日続けることは、創造性と論理的な思考力を育てる方法の一つと成り得る。創造性と論理的な思考力を育成するために読書が効果的であることは佐々木によっても述べられている<sup>18)</sup>。

ただ、ここで確認しておきたいことがある。それは安易に朝の読書に取り組んでみても、成功しないということである。指導者である教師自身が読書の価値を深く理解し、率先して読書に取り組む姿勢がなければ、やがて挫折する。筆者は朝の読書連絡会の会員となっているので、他県の会員から情報を得る機会があるが、成功しなかった例も聞こえてくる。その原因の多くは前記のような教師の姿勢にある。

#### ②朗読の効果

朝の読書が黙読であるのに対して、朗読は声を出すことによって言葉や文章表現に対する関心を高め、論理的な思考力の基礎を培うものである。

「声に出して読みたい日本語(斎藤孝著)」がベストセラーになったが、優れた詩歌や文の一節を暗唱することによる効果は大きいと考える。「朗読の勧め」に反対意見が出ていることについて勝方は次のように述べている。<sup>13)</sup> (一部抜粋)

- ・読書離れには、大人の側からの読書習慣形成の働きかけのなさがある。
- ・義務教育段階の教育には、一定の価値観の押しつけが伴う。自分で判断できるようになる前の押しつけを恐れるべきではない。
- ・まず基盤を形成し、その上に自発性を構築していくべき。
- ・論理性は言葉によってしか培われない。言葉こそ、すべての基礎だ。



この勝方の主張には同調できる。朗読の力は指導者が朗読の場を設定し、朗読の楽しさを教えることによって、関心が高まっていくものである。

総合的な学習だけに止まらないが、学習の基礎としての「朗読の力」の大切さを確認しておきたい。

### ③取り組む時間

朝の読書は特設の時間を設定し毎日実施する。朝の読書を位置づけた具体的な日課表については(5)を参照。

計算・朗読・漢字の習得に関する指導は授業の中で行う。これらの学習のために業間などの特設時間を設定するより、授業の中で行うと子どもの集中力を高めるうえで効果がある。授業開始直後の数分間を利用すると、脳が活性化され本時の学習がスムーズに進むことが多い。

### (4)二学期制と「追究する子ども」

#### ①学校五日制による授業時数の激減

学校の休業日(授業のない日)は思いの他多く、2002年度の本郷小学校における授業日数は202日、休業日は163日である(図3)。町内の学校もほとんど同じか数日の違いである。

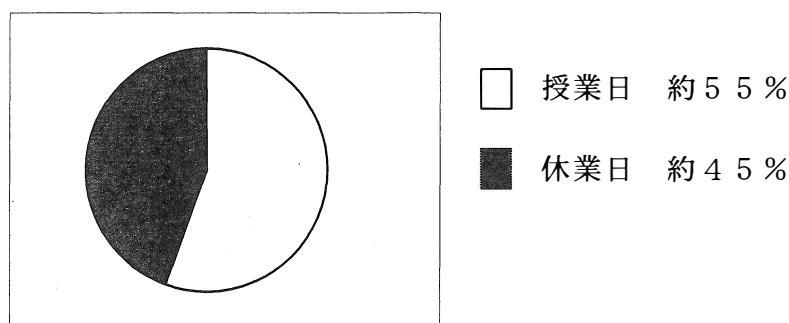


図3 授業日と休業日の割合 本郷小学校 2002年度

年間の45%といえは半数に近い。これだけ休んで子どもの学力はどうなるのだろうかという危惧がある。

この危惧への対応策として、総合的な学習で身に付けた「自ら課題を見付け、学び、考え、判断するという問題解決能力、また、主体的、創造的に取り組み自己の生き方を考えるという態度」を生かして、休業日の163日を有効に活用するという方法が考えられる。

#### ②二学期制

「夏休みが早く来ないかなあ」

「行きたい所や調べたいこと、やってみたいことがたくさんあるのに、普段は学校が終わる頃にはみんな閉まっている・・・。」

こんな声が7月に入って聞こえてくるような学校は、学習の連続性が保たれ、総合的な学習が成功していると言える。

仙台市教育委員会が11年度に検討を始め、平成14年度には市立の全校に拡大されたのが二学期制である。平成14年度現在、弘前市では千年小学校、時敏小学校、小沢小学校、また、浪岡町内の数校が、この二学期制に取り組んでいる。

この二学期制のそもそものねらいは「ゆとりある学びの場の創造」であり、長所と

して次のような点があげられている。

- ・学期のサイクルが長くなることによるゆとり
- ・学校行事の柔軟な設定
- ・始業式、終業式の回数が減
- ・学びの連続性が確保
- ・ゆとりの中で指導と評価の一体化がなされる
- ・その他

そもそもこの二学期制は「教師のゆとり」に重点をおいたものと思われがちであるが、この中で着目したいのが、学びの連続性である。長期休業前に行われる教科の学習を通して、「自ら課題を見付け、学び、考え、判断するという問題解決能力、また、主体的、創造的に取り組み自己の生き方を考えるという態度」が育成されていれば、長期休業中にその成果が現れるのは当然であるし、その成果をみて評価するのも自然である(長期休業終了後の評価)。その意味で二学期制は総合的な学習に適していると考ええる。

ただ、ここで確認しておかなければならないことがある。長期休業を控えて、「課題カード」「追究カード」のようなものを作らせ、教師がかなりの部分で手を差しのべなければ活動出来ない子どもではいけないということである。

自分で課題を見つけ追究活動が出来る子どもが育っていないということは、教科の学習過程が問題解決的になっていないということである。

#### (5) 午前五時間制

筆者は文献<sup>8)</sup>で午前五時間制の背景や長所、短所について述べた。その詳細は論文を参照していただきたいが、ここでは総合的な学習との関連で次の二点について触れてみたい。

##### ① 横断的・総合的な学習

ノーチャイムにして午前中に教科・領域の学習を5時間行う。この利点の一つは子どもの学習意欲や学習の「切れ目」に合わせて、担任が学習時間を設定できることである。チャイムによって分断される細切れの学習ではなく、長いスパンの中で授業を組み立てることが可能なので、横断的・総合的な学習を考えやすい。

また、午前5時間制は午前と午後で活動内容を変えることができるので、午後は、総合的な学習を中心として組み立てるのもよい。

午前のさわやかな時間を利用して、「午前中の授業においては、学年始めに予め決められたもの以外は、天災地変、その他これに準ずるような重大事の起こらない限り、絶対に欠かないことにする。」<sup>15)</sup>という信念をもって望むべきであろう。

##### ② 教師の教材研究の時間の確保

森は「現状では1年から6年までの全教科を通覧しえないばかりか、1教科でもなしうる人は少ない。甚だしい場合は、自分の受け持っている学年の教材さえ、全教科となれば通覧できていない教師も少なくないのではないかと指摘している<sup>15)</sup>。総合的な学習の時間の登場によって、教師は教材研究の範囲が更に広がったわけであるが、この教材研究の時間を午前五時間制によって生み出すことができる。

以上のような点から、午前五時間制は総合的な学習のねらいを達成するために有効であると考ええる。

以上の考察に加え、(3)で取り上げた朝の読書の時間を組み込んだ日課表の案を表1に示す。この案によれば、午後の「のびのびタイム」を2時間10分確保でき、この時間を利用して総合的な学習の多彩な探究活動を展開することができる。また、場合によっては、前記した「前頭葉の活性化」のための「読み・書き・計算」を取り入れることもできる。

表1 小学校4～6年の日課表の案

時	活動・校時	月	火	水	木	金
8:00	朝の読書	朝の読書・朝の会				
8:20	朝の会					
8:20	1校時	1	6	11	16	21
	2校時					
	3校時					
10:30	(トイレ休憩 5分2回含む)	3	8	13	18	23
中 休 み						
10:50	4校時	4	9	14	19	24
	5校時					
12:15	(トイレ休憩 5分1回含む)	5	10	15	20	25
12:15	給食	給食・昼休み・清掃				
13:50	屋休み 清掃					
16:00	のびのび タイム	のびのびタイム				

ところで、この「のびのびタイム」の内容は創意工夫によって、いろいろなバリエーションが考えられる。午前中の5時間は1単位時間が40分である注1。学校教育施行規則では1単位時間を45分としている。(年間の総時数を確保できれば弾力的に運用してもよい。)筆者が述べた日課表では5分不足しているが、これは「のびのびタイム」の中で、横断的・総合的に学習活動が行われることによって解決する。

注1

深浦小学校(2001);平成13年度日課表(西崎正二校長が考えられた午前五時間授業)を参考にした

「のびのびタイム」については工夫によって多彩なバリエーションが考えられる。詳細については機会があれば触れてみたい。

#### 4. 教師の役割の再確認

総合的な学習の内容として、子どもが関心を持っているものであればどんなことでもよい、また活動はほとんど子どもに任せると言う風潮が一部にあるので、ひと言触れておきたい。

筆者は文献<sup>3</sup>で「問題把握」の段階に焦点をあてて、追究意欲を高める「学習問題」づくりのための方法として以下の3点を挙げた。

- ①他からの要望や依頼を受けてスタートする学習
  - ・古代米プロジェクト
  - ・桜プロジェクト
  - ・きゅうりプロジェクト
  - ・観光課の企画に参加
  - ・二分の一成入式
- ②教師の仕掛けからスタートする学習
- ③学習ゲームからスタートする学習

いずれの方法も教師の役割が大きいものである。子どもの興味や関心を大切にするが、教師の願いやねらいも大きな比重を占めている。

このことに関して加藤は次のように述べている<sup>14)</sup>（抜粋）。

- ・子どもが課題を見つけるというのは非常に難しい。楽しみだけで学習を進めていった場合、それが知的な楽しみに進んでいくとは限らない。先生がある程度方向性を示して押しつけない程度に導いてやることが求められる。
- ・子どもが問題を抱えて堂々巡りをしてしまったときには、具体的に教えるのではなく、問いかけをしてみるのがよい。それも「何故？」ではなく、「これについてはどう？」と問いかけると、子どもたちは調べやすくなる。

総合的な学習は、子どもにまかせきりにしてしまう時間ではない。子どもの興味・関心から学習を進める際にも教師の役割が大きいこと、総合的な学習を指導する「教師の力量」が重要であることを再度確認しておきたい。

#### 5. 全校で行う総合的な学習の実施案

「1. はじめに」で、学校行事が総合的な学習に組み入れられることの懸念について触れたが、ここで改めてその解決策について述べる。

これまで、全校で地域の伝統的な遊びや玩具づくり等に取り組むことがあったが、特別活動や「ゆとり」の時間を利用して行っていた。（文献<sup>8)</sup>で述べた青森県三戸郡田子町の清水頭小学校のように、学校独自の活動を行うために教育課程を刷新して午前五時間制とし、午後の時間を自在に活用したという例は少なかった。）このような全校活動が、総合的な学習の登場で「居場所」を見つけて総合的な学習として教育課程の中に位置づけられることがある。

このような場合は、問題解決力を育成する学年を設定し、その学年を核として全体の系統を明確にさせないと、単発的な行事に終わってしまうおそれがある。以下の資料はその点を考慮して総合的な学習の時間の中に組み入れた実施案である。

〔資料1〕総合的な学習「本郷凧づくり」

1.ねらい

- ・地域の人々の生活について、自分で課題を見付け、課題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む。
- ・地域に残る伝統的な本郷凧について、その由来や製作方法を調べ、自分との関わりに気づくとともに、伝統を大切し、自分の生活を豊かにすることができる。

2. 学年ごとの学習内容

学 年	主 な 学 習
(1年)	生活科 ・四季の変化に気づき、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできる。 ・いろいろな凧を作り、冬の校庭で楽しく遊ぶ。
(2年)	生活科 ・四季の変化や自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわったりする。 ・いろいろな凧を作り、冬の校庭で楽しく遊ぶ。
3年	社会科の学習と横断的・総合的に進める  1. 社会科のねらい 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願いを考える。 ・古くから残るくらしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしのようす ・地域に残る文化財や年中行事  2. 総合的な学習のねらい 地域の人々の生活について、自分で課題を見付け、課題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む。 (例として ) ○子どもたちの遊び ○本郷小学校の歴史 ○我が家の歴史 ◎本郷凧  ※ ○は、一人一人が自分で見付けた課題について調べる。 ◎は、これまで二年間学習してきたことと関わる学級全体の課題であるので、さらに細分化して探究活動を行う。  総合的な学習「本郷凧」  ① 1・2年生で凧作りをしてきた経験を振り返り、自分で課題を見付ける。

	<p>② 課題について探究する。 (例として)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昔の本郷凧の遊び・・・祖父母や町内の老人クラブの方にうかがう。</li> <li>・凧とばし名人探し・・・町内会の会長さんにうかがう</li> <li>・本郷凧の由来・・・凧の会の方にうかがう</li> <li>・材料など・・・弘前・土岐さんにうかがう</li> <li>・津軽地方や県内の凧・・・本郷・吉内の老人クラブの人に他市町村の老人クラブの方を紹介していただいて探究する。</li> <li>・その他</li> </ul> <p>※単元名は「本郷凧」であるが、その他の凧に範囲を広げてよい。</p> <p>③まとめと発展 プレゼンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学級での発表会</li> <li>・探究活動でお世話になった方を招いて、発表会を開く。</li> <li>・町内の各学校に情報を発信する。(本郷凧を展示している学校がある。)</li> <li>・県外の学校に向けて発信することも考えられる。</li> </ul>
4年	竹の組み方、糸の付け方などを工夫して、伝統ある本郷凧をより高く飛ばす工夫をする
5年	図案と彩色に工夫をこらして、伝統ある美しい本郷凧を製作する。
6年	これまで習得した本郷凧づくりの技術を生かし、地域の各施設へ寄贈したり、卒業式に展示したりできる作品を仕上げる。

## 6. まとめと今後の課題

総合的な学習のねらいが「学びの基礎を育てること」であることを再確認し、総合的な学習を支える学習技能とそれらを効果的に機能させるための手立てとして、教育課程や教師の役割などについて述べた。

これらの方策が相互に関連性を持って機能すれば、これまでの画一的な教育を見直し、問題解決能力や生きる力を育成することができると思う。

今回は「書く技能」について触れることができなかった。上條晴夫<sup>11)</sup>のすぐれた実践等をもとに、総合的な学習と「書く技能」の関連についても今後検討していきたい。

## 7. おわりに

本論文の作成にあたり、これまでの論文とその際に参考にした文献を再読してみた。また、総合的な学習スタートの元年となった今年度の各学校での実践にも目を向けてみた。その結果、研究先進校といわれている学校とその他の学校との間のギャップの大きさに驚かされた。

総合的な学習については、そのねらいが更に明確になり、教育現場に浸透するとともに、各教科の一層の充実、探究活動の充実、教育課程そのものの改善が行われていかなければならないことを痛感した。

## 参考・引用文献

- 1) 天内純一(2000); インターネットの利用と総合的学習, 弘前大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究員研究報告書, 第8号, pp.29-42.
- 2) 天内純一(2001); インターネットの利用と総合的学習Ⅱ, 弘前大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究員研究報告書, 第9号, pp.93-114.
- 3) 天内純一(2002); 問題解決能力を育てる総合的学習, 弘前大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究員研究報告書, 第10号, pp.85-100.
- 4) 大木光男(2002); 総合なしで学校を再生できるか, 教育ジャーナル2002年11月号, p.18, 学研.
- 5) 佐伯胖(1999); 「学ぶこと」の基礎・基本 初等教育資料, 文部省(文部科学省).
- 6) 川島隆太(2002); 大脳研究最前線, 教育ジャーナル2002年10月号 pp.26-29 学研.
- 7) 有田和正(2002); 総合的学習に必須の学習技能, 明治図書.
- 8) 天内純一(1999); 午前5時間制の意義と問題点, 弘前大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究員研究報告書, 第7号, pp.5-20.
- 9) 林公(1997); 朝の読書 実践ガイドブック メディアパル
- 10) 林公(1998); 心の教育は朝の読書から メディアパル
- 11) 上條晴夫(2000); 総合的な学習のための教育技術, 健学社.
- 12) 早坂五郎(2000); 双方向からの総合的な学習, 東洋館出版社.
- 13) 藤方信一(2002); 「朗読の勧め」への賛否がしめすもの, 教育ジャーナル2002年12月号, p.31, 学研.
- 14) 加藤幸次(2002); 総合的な学習誌上セミナー, 教育ジャーナル2002年5月号, p.10, 学研.
- 15) 森信三(1956); 教育的実践の諸問題, 実践社.
- 16) 天内純一(1997); 社会的判断力の育成を重視した学習, 弘前大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究員研究報告書, 第7号, pp.27-38.
- 17) 杉渕鉄良氏の実践, <http://www.geocities.co.jp/CollegeLife/5802/> (10マス、100マス計算などの実践例が載せられている)
- 18) 佐々木彰; 連載“面白半分”セレクション 第30回 おきかえる力, <http://www2.justnet.ne.jp/~assoonas/WELCOME.HTM> (読書による論理的思考力の育成について言及している)